

原 著

医学科1年生への準備教育としての医学入門の現状と課題

白澤文吾, 藤宮龍也, 瀬川 誠¹⁾, 上田真寿美²⁾, 松井邦彦³⁾

山口大学医学部附属医学教育センター 宇部市南小串1丁目1-1 (〒755-8505)
山口大学医学部附属病院医療人育成センター¹⁾ 宇部市南小串1丁目1-1 (〒755-8505)
山口大学教育機構学生支援センター²⁾ 山口市吉田1677-1 (〒753-8511)
熊本大学医学部地域医療システム学³⁾ 熊本市中央区本荘1丁目1-1 (〒860-8556)

Key words : 初年次教育, 医学入門, プロフェッショナルリズム教育, 卒前医学教育

和文抄録

厳しい受験競争を経て入学した医学生の多くは受動的な学習態度が身につけており, どのようにして入学後の早い時期に能動的な学習態度を形成させるかが医学教育の重要な課題となっている。さらに, 初年次では医学とは必ずしも結びつかない一般教養科目も多く, 学習意欲の低下も大きな問題となっている。このような中で医学専門教育への準備教育として医学入門を1年次前期に開講している。その現状と課題について, 学生アンケートの一部結果と共に, 若干の文献的考察を加えて報告した。

今年度の医学入門は, 小グループ学習によるコミュニケーション能力の養成を中心に, 倫理, プロフェッショナルリズム, 医学概論, 生涯教育, 早期体験実習等の多岐にわたった。

アンケート結果等からは, 学生にとって総じて満足度の高い入門内容であったと思われた。また, 我々が期待した能動的学習態度の形成も, 多数の学生にそれなりの効果があったと思われた。

今後は, 時代の要請を取り入れた内容に柔軟に改善することにより, 専門教育への準備教育により適した医学入門となるように引き続き努力する必要があると思われた。

はじめに

医学科に入学した多くの学生は, 新しい環境である大学での学びの意欲と, 良医になろうという希望に満ちている。しかし, 大学受験では受動的な学習態度が中心となっていて, 入学後の早い時期に能動的な学習態度を学生に形成させることは, 大学教員の重要な課題となっている。さらに, 初年次の教育カリキュラムでは語学を含めた重要な一般教養科目に多くの時間が割り当てられており, これらの科目は医学とは直結しないため学習意欲の低下と関連し, 大きな問題となっている¹⁾。このような中で当医学科は, 専門教育への準備教育として医学入門を位置づけ, 開講している。その現状と課題について, 学生アンケートの一部結果と共に, 若干の文献的考察を加えて報告する。

対象と方法

山口大学医学部医学科では, 入学後間もない1年生の共通教育前期カリキュラムの中で, 医学入門科目(4単位)を開講してきた。今年度(平成26年度)の内容は, 将来, 良好な医師-患者関係の構築に必要な, コミュニケーション能力の養成を目的とした小グループ学習を, 中心の柱に位置づけた。小グループ学習の方法は, 1グループ8-9名ずつ基盤系講座に配属し, 実習や見学を行った内容に関連する

課題を毎回与え、それについてグループ間で討論やディベートを行い、適時教員がチューターの役割を果たすようにした。それに加えて、カリキュラム概論、医学概論、プロフェッショナリズム、倫理・法律、患者安全や診療技術としての心肺蘇生演習、早期体験実習としての高齢者施設体験実習、医学部附属病院・ドクターヘリ・解剖実習の見学実習、生涯教育への準備としての文献検索講習会、外部講師を招いての特別講演会、また課題実習等々の、実習や演習を中心とした多岐にわたる内容で、総コマ数38コ（1コマ90分）で構成された（表1）。

学生の評価は、学生に与えた課題レポートへ教員がフィードバックを行う形成的評価を中心とした。

ユニット終了後の学生へのアンケートは、山口大学共通教育の学生授業評価表を用い無記名回収式で施行した。質問は、あらかじめ選択肢を提示した評定尺度を用いたものと、自由記述による意見や感想の回答を求めた。倫理的な配慮として、各学生には回答は無記名の任意であり、成績評価には影響しないことを文章や口頭で伝え、さらに結果の一部を学術雑誌や学術集会で発表する可能性について口頭で伝え、了承を得た。

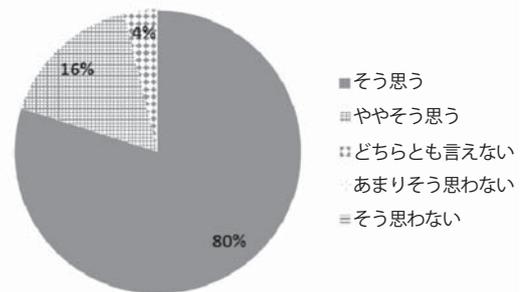
結 果

学生へのアンケート調査票の回収率は、99.1%（106/107）であった。

「この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？」との問いに、「そう思う」「ややそう思う」との肯定的回答が96%と非常に高かった（図1-A）。また、「本科目のシラバスに記載された学習目

標を達成したと思いますか？」との問いにも、「そう思う」「ややそう思う」との肯定的回答が88%であった。さらに本科目の目的の一つである能動的学習態度の指標としての「授業1回あたりの時間外学習時間」についての問いでは、「1時間以上行った」と回答した学生が82%に上り、「3時間以上行った」との

A この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？



B あなたはこの授業において、授業1回あたり、時間外学習をどれくらい行いましたか？

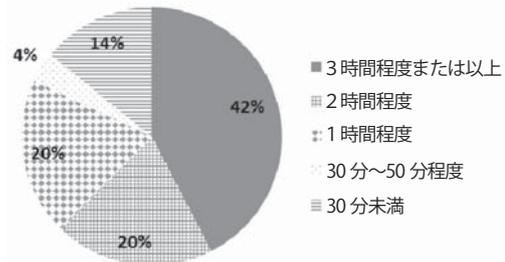


図1 学生へのアンケート調査回答

- A. 「この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？」との問いに、「そう思う」「ややそう思う」との肯定的回答をした学生が96%と非常に高かった。
- B. 「授業1回あたりの時間外学習時間」についての問いでは、「1時間以上行った」と回答した学生が82%に上り、「3時間以上行った」と回答した学生も42%いた。一方で、「1時間未満」と回答した学生も18%いた。

表1 平成26年度医学入門の授業構成内容

回	通算コマ数(1コマ90分)	講義内容
1	1,2	総合オリエンテーション・SGD
2	3,4	科学題材を基にしたSGD
3	5,6	医学部附属病院見学
4	7,8	医学部附属病院見学を基にしたSGD
5	9,10	心肺蘇生演習・医学部図書館ツアー
6	11,12	医学概論序説・Professionalism
7	13,14	倫理教育(1)
8	15,16	解剖実習・ドクターヘリ見学
9	17,18	倫理教育(2)
10	19,20	解剖実習を基にしたSGD
11	21,22	高齢者施設体験実習オリエンテーション
12	23,24,25,26,27	課題実習(医療の国際貢献、共有地の悲劇等)
13	28,29,30,31,32	高齢者施設体験実習
14	33,34	高齢者施設体験実習を基にしたSGD
15	35,36,37,38	フレッシュマンセミナー・特別講演会

SGD: small group discussion

表2 学生へのアンケート調査の自由記述回答

- 年間を通してこの科目があっても良いと思った。
- 医学を学ぶ導入として、この科目が手助けしてくれた。
- これからもさらに幅広く学ぶ教材を提供して欲しいと思った。
- レポート類の提出が多かったが、今後の事を考えると必要だと思った。
- 専門科目がない一年生にとって医学部生としての自覚や意識を保つために良い科目であった。
- もう少し実習が多くて良いと思った。
- 将来のキャリア形成についても学びたかった。
- 小グループ学習は、班ごとによって充実度に違いがあるような気がした。

回答も42%あった。一方で、「1時間未満」との回答した学生も18%いた(図1-B)。

自由記述回答では、医学を学ぶ導入科目としての意義や、医学部生としての自覚や意識を保つために良かったとの意見がある一方、小グループ学習の班ごとの充実感の違いへの不満や、将来のキャリア形成等についての講義の要望などがあった。主な自由記述回答は表2にまとめた(表2)。

考 察

医学教育の初年次教育の中で、医学概論や早期体験実習の重要性は広く認識されている^{1, 2)}。さらに最近では、医師としての倫理、コミュニケーション能力、またプロフェッショナリズム等の関連した教育も重視されるようになってきている^{3, 4)}。特に、プロフェッショナリズム教育に関して我々は、朝比奈らの報告³⁾を参考とし、平成25年度より医学入門の内容変更を行ってきた。その際に、医学教育モデル・コア・カリキュラム(平成22年度改訂版)で明示されている「医師として求められる基本的な資質」の8項目(医師としての職責、患者中心の視点、コミュニケーション能力、チーム医療、総合的診療能力、地域医療、医学研究への志向、自己研鑽)も踏まえた授業内容となるような試みを行っている。さらに医学入門の最も大事な目標点として、「医学の成果を教えることではなく、医学の本質や医学のあるべき姿を自ら追求し続ける態度や習慣の形成」⁵⁾を重視した。今回のアンケート結果からは、今年度の医学入門は、学生に好意的に受け入れられていた。ただ、班ごとによってグループ学習の充実度に違いがあるとの意見もあり、来年度以降の検討課題であると思われた。また、キャリア形成の要望については、2年次以降でキャリアプランについての講義が準備されているが、初年次からの導入等も含めて今後検討する予定である。

具体的な内容変更として、初年次からの医療倫理教育を開始した。これまで山口大学では2年次に医療倫理、4年次で臨床倫理テュートリアル、医療安全テュートリアルを開講してきた。今後は、更なる低学年次からの倫理教育の導入が必要と考えた。しかしながら入学間もない学生に、敷居の高い内容とならないよう、DVD等を用いて身近な話題から考

えられる医療倫理となるよう配慮した。さらに、患者安全や診療技術習得として位置づけた心肺蘇生演習も今年度より開始した。近年、一次救命処置(Basic Life Support, BLS)や自動体外式除細動器(Automated External Defibrillator, AED)が全国的に普及している中で、初年次の早い時期にこれらを正規カリキュラムに取り入れることで、医学生としての自覚を促すことを期待した。これら以外にプロフェッショナリズム教育の導入は、これまで本学の公式な教育カリキュラムの中にはなかったものであり、大きな試みであったと考えられる。プロフェッショナリズム教育の定義や方略、評価等には未だ様々な議論³⁾がある。医学教育学会の倫理・プロフェッショナリズム委員会からの提言⁶⁾によると、プロフェッショナリズム教育のカリキュラムデザインで重要なことは、「プロフェッショナリズム教育に関する教育内容について明記して運用すること」、「医のプロフェッション側のこのような努力を、医療界を挙げた活動として展開すること」であるとされている。我々は、プロフェッショナリズムとして「信頼できる医師」であることを示すためにあらゆる努力を払う姿勢を生涯継続する⁷⁾第一歩として欲しいと期待し、教育内容カリキュラムを検討した。しかし、プロフェッショナリズム教育は、今回のように単回で教えるのみでは不十分であり、学習の進捗状況に応じたより次元の高い内容へ、継続して実施することが教育効果を高める³⁾とされている。このため今後は、学年縦断型でのプロフェッショナリズム教育の導入が検討課題であると思われた。

もう一つの課題として能動的学習態度の養成があげられた。その指標の一つとして「授業1回あたりの時間外学習時間」についてのアンケート結果からは、「3時間以上時間外学習を行った」と回答した学生が43%いる一方で、「時間外学習が1時間未満」と回答した学生も18%と少なからずいた。今回の時間外学習は、課題レポートの作成に大半の時間を要したと思われ、レポート作成の取り組みに問題がある学生が少なからずいたものと考えられた。学生の初年次の学習行動パターンが卒業時まで影響することは良く経験することであり、入学早期の段階で学習意欲にやや欠けていると思われる学生へ積極的なアプローチを行うことが今後の重要な課題であると考えられた。これらの課題の解決策の一つとして、低

学年次からのメンター制度が有用であると報告⁸⁾されている。山口大学では、3年次学生から教員有志によるメンター制度が開始されているが、さらなる低学年次からのメンター制度の創設も今後の検討課題であろう。

今回は、学生アンケート結果からの分析のみであったが、今後は医学入門に多大な協力を頂いている基盤系教員へのアンケート等も実施して、学生・教員の双方に有益な医学入門となるように更なる改善が必要であると考えている。以上、諸々の課題はあるものの、医学入門は、専門教育前の準備教育として重要な学習機会であり、その学習効果を更に上げるためにも、カリキュラム全体を見通した上で、今後も引き続き努力する必要があると思われた。

結 語

1. 医学科1年生への準備教育としての医学入門の現状と課題について報告した。
2. 学生へのアンケート結果からは、総じて満足度の高い入門内容であったと思われた。
3. 時代の要請を取り入れた内容に柔軟に改変することにより、専門教育への準備教育により適した科目となるように今後も引き続き努力する必要があると思われた。

謝 辞

本科目にご協力頂きました実習施設関係者の皆様、および基盤系講座をはじめ学内関係者の方々に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 峠田和史. 能動的な学習態度の形成を目的とした医学概論の試み. 医学教育 1998 ; 29 : 385-391.
- 2) 大坪芳美, 酒見隆信. 医学科1年早期体験実習における実習の効果度と満足度の比較検討. 医学教育 2011 ; 42 : 1-7.
- 3) 朝比奈真由美, 河本慶子, 宮田靖志ほか. 医師養成課程におけるプロフェッショナルリズム教育の現状調査. 医学教育 2012 ; 43 : 447-452.
- 4) 宮田靖志, 山本和利. 卒前教育におけるプロフェッショナルリズム・コース開発の試み. 医学教育 2010 ; 41 : 189-193.
- 5) 中川米造. 医学校における「医学概論」の授業についての調査. 医学教育 1978 ; 9 : 379-388.
- 6) 宮田靖志, 野村英樹, 尾藤誠司ほか. 提言医師養成課程におけるプロフェッショナルリズム教育の導入と具体化について. 医学教育 2011 ; 42 : 123-126.
- 7) 野村英樹. 第32回医学教育者のためのワークショップ (富士研ワークショップ) の記録-医師に求められるプロフェッショナルリズムとその教育-. 医学教育 2006 ; 37 : 252-253.
- 8) 「第36回医学教育者のためのワークショップ」参加者による卒前・卒後の医学教育, そのつながりを観点とした医学教育改善に関する提言. 医学教育 2010 ; 41 : 222-225.

Current Status and Issues in Offering a Course on Introductory Medicine as Preparatory Education for First Year Undergraduate Medical Students

Bungo SHIRASAWA, Tatsuya FUJIMIYA, Makoto SEGAWA¹⁾, Masumi UEDA²⁾ and Kunihiko MATSUI³⁾

Center for Medical Education, Yamaguchi University School of Medicine, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan 1) Career Development Center, Yamaguchi University Hospital, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan 2) Student Support Center, Organization for University Education, Yamaguchi University, 1677-1 Yoshida, Yamaguchi 753-8511, Japan 3) Department of Community Medicine, Kumamoto University Hospital, 1-1-1 Honjo, Chuohku, Kumamoto 860-8556, Japan

SUMMARY

First year medical school students are offered a course on introductory medicine to prepare

themselves for professional education.

The present study is aimed to explore the current situation and challenges in offering such a course. This paper shows the results of a student questionnaire administered on this course, which are then discussed in the light of literatures.

We found that, after students had received communication skill training via small group learning, this course on introductory medicine helped students learn ethics, professionalism, and medical knowledge ; provides early exposure ;

and aids lifelong education.

The questionnaire results revealed that students were highly satisfied with the introductory contents. In addition, owing to this course, as expected, majority of the students have developed an active learning attitude.

These findings suggest that there is a need to continue offering a course on introductory medicine that flexibly incorporates the current demands as medical professionals, and prepares students for professional education.